

第三卷

私は、成功するまで頑張りつづける。

東方の闘牛を行なう国では、闘牛用の若い雄牛を選びだすとき、次のような方法で、その能力を試される。牛は競技場へ引きだされ、闘牛士の槍で、軽く突つかれるのである。勇猛な牛は、闘牛士を攻撃する。牛は何回も突つかれる。このときの、牛の反撃のありさまを見て、闘牛用の牛としての等級がつけられる。

刺された傷にもめげず、何回も反撃した勇敢な牛のみが、闘牛用の牛として選びだされるのである。

これより、私は、これと同じ方法で、毎日、人生そのものに試されるのだ。いかに傷つこうとも、いかに血を流そうとも、私が頑張り前進しつづけければ、私は必ず成功する。

私は、成功するまで頑張りつづける。

私は敗北するため、この世に生まれてきたわけではないし、失敗が私の血管の中を駆けめぐっているわけでもない。私は羊飼いに鞭うたれるのを待っている羊ではない。

私はライオンである。私は、羊たちとともに、話し、歩き、眠ることをきっぱりと拒絶する。私は、泣きごとを言ったり、愚痴をこぼす者の言葉を聞かない。なぜなら、それは伝染性の病だからである。彼らは羊とともにいるがよい。私は、失敗という名の屠殺場へ引かれていきたくはないのである。

私は、成功するまで頑張りつづける。

人生の栄光は、それぞれの旅の終わりにあるのであって、始めたばかりの地点にはない。そのうえ、その目標地点へは、何歩で到達できるのか、私には知るよしもない。千歩あるいて後、私は失敗と出会うかもしれない。しかし、次の曲がり角の向こうに、成功は隠れているのかもしれないのだ。だが、その角を曲がらないかぎり、何人も、そこに成功があるかどうかは、けっして知ることはできないのである。

私にできることは、ただ、次の一步を踏みだすことだけである。ゆえに、私はつねに次の

一步を踏みだす。その一步が、無駄な一步であろうと、有効な一步であろうと、それは私の関知するところではない。

事実、一度に一步だけ踏みだすことは、そう難しいことではない。問題は、それをくり返せるかどうかである。

私は、成功するまで頑張りつづける。

私の毎日の努力とは、あたかも堅い樫の大木に加えられた、斧の一撃のようなものである。最初に、斧が打ちこまれても、木は微動だにしない。二度、三度とくり返されても同様である。それぞれの一撃は無意味であり、何の効果も生じないように見える。しかし、子供じみたこの一撃も、それがくり返されることにより、樫の木は、ついに倒れるのである。今日の私の努力は、まさにこれである。

私は、山をも流し去る一粒の雨である。虎を食いつくす蟻である。大地を照らす星である。ピラミッドを築く奴隷である。私は、レンガを一個ずつ積みあげて行って、巨大な城を建てようとする者である。なぜなら、私は、ほんの小さな試みも、それがくり返されることによ

って、いかに困難な仕事も成しとげられることを知っているからである。

私は、成功するまで頑張りつづける。

私は、敗北については、けっして考慮しない。また、私の辞書には、次のような言葉はない。曰く、「やめる」「できない」「力が足りない」「不可能だ」「問題外だ」「ありえない」「失敗」「実行は無理」「絶望的」「撤退」。なぜなら、これらは愚か者の言葉だからである。

私は絶望は避けるつもりだが、それでも、万一、この絶望という心の病に感染してしまつたなら、私は、この絶望の中でも働きつづけよう。私は努力し、耐えぬく。私は、足元の障害物には目もくれず、頭上を見あげ、目標地点を見つめる。なぜなら、私は、はるかな乾いた砂漠の彼方に、緑生い茂る希望の土地があることを知っているからである。

私は、成功するまで頑張りつづける。

私は、古くから伝わる「大数の法則」を思い出し、自分の人生に当てはめる。

それは、売ろうとして失敗したときに学んだ知識は、次の販売の機会に成功をもたらすと

いう考え方である。

言うなれば、「失敗の頻度は成功の高さに正比例する」ということである。私が、お客さまから、「ノー」と言われるたびに、それは、「イエス」という声に近づくのだ。お客さまの渋い顔つきは、やがて、笑顔に変わり、そこに友情が生まれる。

私の出会う不運の数々は、明日の幸運の種を、私に運んでくるのである。

夜があるゆえに、我われは、昼の尊さを知っている。私は、ただ一度の成功を得るために、数多くの失敗を必要としているのだ。

私は、成功するまで頑張りつづける。

私は試みる。何回も何回も試みる。

それぞれの障害物は、私の目標へのたんなる回り道にすぎないし、私の仕事に対する挑戦でもある。船乗りが荒れ狂う海を一つ乗り越えるたびに、航海の技術を身につけていくように、私は困難を克服しつつ進歩する。

私は、成功するまで頑張りつづける。

私は、先輩から仕事の秘訣を学びとり、そのやり方を自分の仕事のやり方へ、取りいれてゆく。一日が終わろうとするとき、その日の売上げが多かろうと少なかろうと、もうひとふんばり頑張って、もう少し売ろうとする。疲れたからだだが家へ帰りたがっても、私は、その誘惑に抵抗する。そして、もう一度売ってみようとするのだ。

私は、勝利をもつて一日の終わりとしたい。いかなる日でも、失敗をもつて終わりとしたくないのである。

このようにして、明日の成功のための種を、私は蒔きつづけるのであり、時間にしたがつて休む者たちが、けっして得ることができない有利な立場に、私は立つのである。

彼らが戦いをやめるときに、私の戦いは始まる。そして、私の収穫は莫大なものとなる。

私は、成功するまで、頑張りつづける。

私は昨日の成功をもつて自分を甘やかし、今日の自己満足とはしない。なぜなら、これこそ、失敗の最大の基本要素となるものだからである。

私は、すでに過ぎ去った日々[・]の出来事が良かつたことであろうと、悪かつたことであろうと、いつさいを忘れることにする。そして、今日こそが、わが人生最良の日と確信して、日の出を迎えるのだ。

私は命あるかぎり頑張りぬく。なぜなら、今こそ、私は、成功のための最大の原理を知つたからだ。その原理とは、「やりつづけることが、勝利への道だ」ということである。

私は頑張る。

私は勝つ。